

令和7年度 第4回白馬高等学校学校運営協議会 議事録(概要)

1 日 時 令和7年(2026年)2月17日(火) 9時30分～11時00分

2 場 所 白馬村保健福祉ふれあいセンター学習室

3 出席者 委員14名 以下敬称略

- ・武田彰代(大町市立美麻小中学校講師 元白馬村教育委員長)
- ・柴田友造(小谷村議会副議長)
- ・草本朋子(白馬インターナショナルスクール理事長)
- ・笹川陽子(めぞん・ど・ささがわ)
- ・松澤忠明(前PTA会長)
- ・白戸洋(松本大学総合経営学部観光ホスピタリティ学科教授)
- ・小林かおる(小谷村立中学校長)
- ・丸山俊郎(白馬村長)
- ・中村義明(小谷村長)
- ・北村幸治(白馬山麓事務組合事務局長)
- ・石川順三(白馬高等学校長)

欠席委員

- ・相沢さつき(同窓会副会長)
- ・太田伸子(白馬村議会議長)
- ・中村和彦(白馬村立白馬中学校)

その他の出席者

- ・原多恵子(高校教育課主幹指導主事)
- ・宮嶋直美(高校教育課主任指導主事)
- ・白馬村副村長
- ・小谷村副村長
- ・白馬村教育課長
- ・小谷村教育課長
- ・白馬山麓事務組合白馬高校支援係係長、主任、白馬高校魅力化コーディネーター
- ・白馬高等学校教頭、事務長

4 次 第

(1) 開会の言葉(藤森要白馬高等学校教頭)

(2) 長野県教育委員会挨拶(原多恵子主幹指導主事)

○本日の会議では、特色ある学びや活動の様子とともに、重点目標実現に向けた取組みについての報告、進路状況などを共有し、白馬高校の未来を見据えた重要課題について、意見交換を行いたい。
○前期選抜試験については、地域をはじめ、多くの方々のさまざまな活動が、白馬高校の働きを広く伝えていることは間違いない。感謝とともに、引き続き協力をよろしくお願いしたい。

(3) 学校長より挨拶(石川順三白馬高等学校長)

○(オリンピック開催を受けて)本校もインターハイでスキー部の生徒たちが頑張っている。アルペンをはじめ、クロスカントリー8位、スーパージャンプ5位入賞など、それぞれが活躍をしている。
○前期選抜については後程報告。

(4) 報告事項

①学校より報告事項

＜石川校長＞

- P 4～7には写真を掲載。教室を飛び出して授業をする様子が写真からも分かると思う。「環境（科目）」の写真は川の虫や魚を捕っている様子、また今年は東急ホテルの料理長からカレーの作り方を教わった。
- P 6の探Q フェスティバルでは、普段前に出て発表する子だけでなく、後ろの方に隠れている子たちも連れて行き、発表を行った。白馬フォーラム（12月17日）では、代表者が体育館で発表する一方で、午後は各教室で2年生全員が発表。スキー・スノーボード実習も予定通り実施。
- P 8は「令和7年度の重点目標実現に向けた取り組み」、P 9以降は「重点目標の状況と評価」。特に昨年度と比べ変化のあった部分のみ説明していく。「（1）生徒状況の把握と生徒への支援」では、希望者を対象とした、スクールカウンセラーによるカウンセリングを計画的に実施。延べ44名が受けた。生徒の希望に応じたカウンセリングを取れるよう、体制を整えた。「（2）地域と共にある白馬高校生としての自覚の喚起」については、寮生を中心に地域の活動に参加し交流を深めた。「木流川と親しむ会」、「塩の道祭り」、「酒米作りプロジェクト」、「食品ロス削減運動」などに参加した生徒も数多くいる。こうしたボランティア参加をきっかけに課題探究活動に繋げる生徒もあり、ボランティアが探究の推進役・エンジンになっていると感じている。「（3）個に応じた学習支援」は、チームティーチングや少人数クラス編成により、きめの細かい指導ができたと感じている。
- P 10「2 地域からの提案を活用した、環境と観光、国際を軸とする探究的で多様な学びの機会の提供と生徒個々のキャリアデザインの具体化支援」について。「（1）地域コンソーシアムの協力による教育活動の実施」のところでは、「時事問題（科目）」の中で、地域課題である「大糸線の活用」についてインタビュー等を行った。住民の方のトーンはさまざまだったが、生徒は存続の難しさを率直に感じ、白馬フォーラムで発表。「（2）みらい協育サポーターとの連携事業の具体化」に関しては、3年生希望者6名が白馬東急ホテルやシェラリゾート白馬にて就労体験。「観光実務（科目）」を選択する生徒を対象とする高校生ホテルは、今年は白馬パークホテル（白馬五竜）に依頼。3月に国際観光科2年生が体験予定。客層の多くがインバウンドであり、外国人と接触する内容となり、これまでの接遇とはまた違う良い経験になると考えている。「（3）検定資格の取得促進」は、P 18「2025年度 英語検定 受験者合格者数」を見ても分かるように、受験者数が増え、特に準2級は30人受験している状況。県外からの生徒だけでなく地元の生徒も受験し、合格の場合は村からの受験料補助も受けられる。
- P 12、支援係との連携について。全国募集の説明会として、今年是对面で東京2回、名古屋1回、大阪1回実施。寮生への生活支援として支援係と毎月1回連絡会を行い、密に連携。
- P 13「（1）地域みらい留学への参画」に関しては、今年は本校の他、小諸高校など3校が参加。オンライン説明会を計5回実施。今後も継続していく。「（2）地元中学生およびその保護者に対する積極的な情報発信」については「白馬高通信レポートチャンネル」を2ヵ月に1回発行。ただし、本校のホームページの「白馬高校の日常」については更新が課題。今年度末にホームページをリニューアル予定。「（3）地元小中学校の学習活動への参加・協力」では、白馬中学校を対象とした学校説明会を本校で実施し、小谷中学校とも職員間交流を行った。白馬中、小谷中との学校間協力に関しては比較的密にできたと思う。新たなアイデアがあれば交流をさらに深めていきたい。
- P 14「令和7年度 卒業生 進路決定先」について。今年は信州大学教育学部の合格者を出すことができた。その他、希望する大学・短大・専門学校に合格。就職希望者は全員決定。

②白馬山麓事務組合より

＜北村局長＞

- 取り組みの成果と今後の活性化について。令和7年度は募集の回数自体を半分程度に減らした。その理由としては、より効果的な募集につなげたいと考えたため。回数を減らしたことで、接遇した人数も半分程度となっている。感触としては、個別・対面での説明時間がその分長くなり、より深い内容を説明できているのではないかと考えている。また、地域みらい留学の参画校が増えていることも、接遇人数減少の要因になっていると思う。令和8年度も受検の状況や県外生徒の傾向（出身地域など）を明確に打ち出し、分析をしながら、次年度9年度以降の効果的かつ効率的な募集活動につなげていきたい。

(5) 今後の白馬高校の在り方について意見交換

<石川校長>

- 来年度以降の白馬高校の在り方について。平成 26 年に全国募集の国際観光科がスタートし、今年で 10 年目。令和 6 年度、7 年度の国際観光科では、ようやく志願者数が定員を超えている状況。令和 8 年度入試は、受験者数計 53 名。そのうち普通科は 11 名、国際観光科は 42 名。県外からの志願者は 22 名。内訳は関東が中心、関西方面からは 1～2 名。令和 7 年度に比べると関西方面はやや少ない。国際観光科の倍率は 1.4 倍となっており、多くの生徒から志願があった。地元の中学生に関しては、例年白馬中、小谷中の 3 年生の約 30%が受験。これから 5 年後、10 年後、そもそもの生徒数が少なくなってくる中で、国際観光科は県外が軸になってくることも予想される。
- P19「1 コロナ禍からコロナ明け以降の状況（国際観光科入学生推移）」を見ると、令和 6、7 年と極端に増加。ちょうどコロナ明けで県外からの受験生が戻ってきた時期と思われる。P17「国際観光科 過去 5 年間の受験状況」にもあるように、概ね県外の受験生が多いという状況。
- 「2 学習実績」について。今の 1～3 年生の進路希望を見てみると、大学希望者が増加している。これは、県外からの生徒たちが高い目標を持って来ているためと考える。
- 「3 校長の私見」。「(1) 寮の状況について」は、支援係が 24 時間体制で見てくれており、(支援係との) 連携によって寮生の様子も把握でき、非常に助かっている。一方で、寮則違反で退寮となると、近辺で下宿やアパートを借りることはほぼ不可能なため、大町や松本方面から通う生徒も出ている。結局、退寮が退学に直結するような状況。寮の食事は、現在は女子寮のみ食堂が開いており、男子寮、大下寮の入寮者は食事のために女子寮まで行かなければならない状況にある。人件費や物価高騰を考えると、やむを得ないかと思う。下宿先も高齢化が進み、今後、下宿を引き受けてくれるところが少なくなっていくのではないかと懸念がある。
- 県外生が増えることについて、地元の方の「地元生をもっと増やしてほしい」という思いは分かる反面、県外生が課題探究学習の中心軸となって動いている側面もある。例えば、白馬高校を一躍有名にした気候変動のデモ活動や教室の断熱改修活動などは、軸になっていた子の多くが県外生。こうした県外生に触発される形で、地元の生徒も探究活動に前向きになるという状況がある。県外生の課題探究活動に対する熱量は、地元にはない部分。県外生は「白馬」というブランドに惹かれ、わざわざ寮に入ってまで勉強しに来ているため、モチベーションが違うのだとこの一年を見て感じている。
- 国際観光科が 10 周年を迎えたのを機に、同窓会と連携し、卒業生の現状（居住地や勤務先など）、高校への協力依頼に対する対応の可否を確認するため QR コードを作成、同窓会誌とともに送付。これからは卒業生の動きも把握する必要があるだろう。
- これからの運営に関しては、白馬村、小谷村が少子化を迎える中で、県内の割合を増やす目標を達成するためにどうしていくか、新しい白馬の学びをどうすべきかを、寮の在り方も含めて議論できればと思う。

<白戸会長>

- 質問等含め、活発な意見交換をお願いしたい。

<丸山委員>

- 受験者数 53 人だったことについて。来年、再来年、単純にその数字を足していくと 53×3 となり、今後 3 年間の生徒数が 159 人。160 人には足りないイメージになる。そうなるとプロモーションが足りない、という考え方にもなってくるかと思う。

<石川校長>

- 本校が「中山間地特定校」として当てはまるかははっきりしていないが、本校のような県境の高校については、すぐに 160 名という数字が適用されるわけではないと言われている。柔軟に捉えてもらえればと思う。

<丸山委員>

- 行政側としては予算編成に関わるので、例えば今後、募集回数をさらに増やした方がいいのか、あるいは県外生が増える中で寮の増築や下宿の確保をこの 1、2 年で話すべきタイミングなのか、を確認したい。

<石川校長>

- 私見ではあるが、これからも県外生を受け入れていくことで、160～170 人という数字を維持するこ

とは必要だと考えている。一方で地元の生徒数がどうしても減少してしまうという課題もある。また現在、寮は一部屋3人で運用。人間関係を構築する上でも厳しい部分もある。2、3年のうちに早急に必要かどうかははっきり言えないが、この先も県外生を抱えていくことを考えると、寮の増築等があるとありがたい。

<丸山委員>

○県への要望となるが、これから白馬村でも宿泊税が始まり、次世代育成・観光面での人材育成として活用することも考えられる。県でもエリアに限らず、宿泊税をこれからの人材のため、寮の整備などに充てていくことも検討してほしい。

<柴田委員>

○P18、英語検定の受験者合格者数について。もう少し合格者数が増えてもいいのかなと感じる。せっかくの国際観光科であるので、もう少し英語に力を入れてほしい。支援係や塾でのサポートに力を入れることは可能だろうか。

<石川校長>

○公営塾を希望する生徒も徐々に増えてはいるが、まだ何十人もいないという現状ではない。英検の合格率ともリンクさせながら、今後そうした塾への参加等を考えていかなければならないと思っている。通常授業については、英語のスキルが高い子と苦手な子の幅がかなりあるが、英検受験を積極的に啓発していこうと思う。

<白戸会長>

○来年から大学でも志願者がぐんと減っていく時代に入っていく。たとえ地元の子が一定数いたとしても、定員を埋めることは難しくなってくる。白馬高校がこの10年やってきたことを見ると、地域に高校があることで地域に良い影響を与えてきたことは事実。地域の外から来てもらうとなれば、寮や下宿の課題が生まれ、その負担も含めて「高校が地域にある意味」を学校関係者だけでなく、地元の方に理解してもらうことがポイントになってくる。他の自治体が「いかに若者を定着あるいは移住させるか」、「若者にどうアプローチしていくか」で苦労している中で、高校生が毎年20人も来てくれるのは非常に大きなチャンス。最近では若者だけでなく、松本などでも二拠点生活や二拠点でビジネスをする人が増えている。そうしたことを含め、高校の在り方を考えていくことが大事。

○英語に関して言うと、実は県内の私立大学では、入試で英語を必修にすると志願者が減るため、英語を選択制にする大学が増えている。英語を勉強することが白馬や小谷にとってどういう意味があるのか、という点まで考える必要がある。例えば観光の仕事に就くのであれば、外国人利用客が多いため勉強せざるを得ない。英語を勉強するモチベーションよりも、そういう仕事に就くモチベーションを作ったほうが、英語の意欲が湧くこともある。カリキュラムや高校そのものの在り方を見直す時期に入っている。

○農業大学では、農業への就農率の低さが問題になり、10年ほど前にカリキュラム改革を行った。若者が少なくなっているため、農業に就くだけでなくJAなどの農業関連の仕事まで含めて「就農」として捉え、カリキュラムを考えようという意見が出た。白馬高校も、学校の在り方を地域の将来に合わせてアジャストしていく時期なのだと思う。「白馬村がどうなっていくか」の延長線上に「白馬高校の将来をどうするか」がある。場合によっては、県外生が将来白馬に定着するために何ができるか、といったことも議論する必要があると感じている。

<武田委員>

○最近、私立の高校入試がどんどん早くなっており、受験生に聞くと、「早めに合格を決めて安心したい」という答えが返ってくる。公立高校が定員割れしていたとしても、公立高校を受けるのではなく、通信制の学校を選ぶ傾向にある。不登校の生徒が多くなってきているが、勉強ができないわけではなく、人とのつながりの中でうまく行かず、学校に行けなくなっているケースもある。白馬高校も今の状況で安心するのではなく、ここから次を目指していくことが大切だと思う。学校に来られない子も広く学べる、そんなチャンスが与えられるような場所になってほしい。

<柴田委員>

○授業内容について、子どもたちの経験につながるようなものに取り組みせるとよいと思う。環境の授業に関しても、もう少し踏み込んだ内容にしてもよいのではないだろうか。

<笹川委員>

○白馬高校は地域校として地域の受け皿であり、今後の白馬を担っていく人材を育てる場所であって

- ほしいと思う。「子どもたちに英語力を」という話があがったが、地域の外国人企業とタイアップして高校のカリキュラムをより良くしていければ、子どもたちも国際感覚を身につけられるのではないかな。それが白馬の将来を担っていく人材育成につながっていくのだろうと思う。そのためには、地域との連携をさらに深めることも必要だと感じる。ホテルを経営しているマネージャーやスタッフの方から、外国人スタッフが多く、地域の人と触れ合う機会がないと聞く。白馬高校の子どもたちが関われるきっかけでもあると思うので、具体的に形にしていくことが大切になってくると思う。
- 白馬高校の日常をもう少し発信していくと、県外生の保護者の安心にもつながるし、プロモーションにもつながると思う。

<松澤委員>

- 妻が外国人の経営する企業で働いている。毎年、節分に外国人スタッフを呼び、イベントを行っている。今年は13人参加し、良い交流を持つことができた。こうした外国人との交流を高校でももう少し行ってもよいと思う。両村で多額の金額を負担してもらっているので、なるべく地元にある資産を活用していくとよいのではないだろうか。
- 地域の人とコミュニケーションを取りながら、大学卒業後やUターン、Iターンで、なるべく地域に就職できるような道を作ることが大切かと思う。

<小林委員>

- 今年度、前期試験を受験した生徒たちは、「地元に残って活躍したい」「英語の力もつけたい」という思いを持っている。(小谷中が)少人数だったこともあり、いろいろな場で活躍してきた。総合的な学習等で学んだことが高校でも生かされると思う。「近くで学校で頑張ってほしい」と願う保護者の割合が増えてきており、白馬高校の良さが伝わってきていると感じる。
- 今年度も卒業生が訪問し、とてもよいプレゼンテーションをしてくれた。普段の学習成果なのだと感じる。前向きな態度で、放課後の使い方や学校生活のことを自分の言葉でしっかり伝える姿があり、生徒も先輩にあこがれを抱いている様子が見られた。
- 本校にも複雑な家庭環境に置かれる生徒もいるが、そうした子たちも安心して学べる学校であってほしい。

<中村委員>

- 私立高校の無償化で、公立高校が不利になることは目に見えている。白馬高校は先進的に取り組んできたが、ニーズがどんどん減ってくる中で今後どうするかを議論すべきだと思う。再編について「県境にある高校については存続してもよい」という話だが、どのように存続していけばよいのかを県が示してほしい。実際に運営するのは白馬村・小谷村。全国募集を重ねていけば寮の問題にもつながり、生徒の募集を断念せざるを得ないことにもなりかねない。県としての考えをもう少しはっきりと示してほしい。
- 通信について。白馬高校でも併用のような形で通信ができるようになれば、非常によいと思う。
- 寮の増築については、白馬、小谷、県も併せ、あるいは国費の活用等も含め検討し、早めに行動できればと思う。

<草本委員>

- 白馬高校を希望する生徒が増えてきているのも、中学校へのプロモーション等が功を奏しているのだと思う。全体的に少子化が進む中で、県外から生徒を取り合うのもそのうち限界がくるが、白馬高校の「白馬の環境やコミュニティを生かして行うことができる教育活動」は認められてきていると感じる。それは今後AI化が進んでも強みにしかならないだろう。国際観光科ができたばかりの時は、何が白馬らしい教育なのか手探り状態だったが、徐々に形ができてきて、白馬だからこそできるユニークな学びが全国に知られてきていると感じる。
- 人数が少なくなる中でさまざまな選択科目を用意するのが難しくなってくる。いろいろなことに興味がある生徒が入学できるように、その場に先生がいなくても何かしらの授業を受けて単位がもらえるような制度があるとより魅力が増すと思う。現在HISでも東京大学の実習研修先にしてもらっており、院生や学生とつながりを持たせてもらっている。来年度以降も大学と連携をしていくので、白馬高校とも一緒に探求活動ができればと思っている。白馬という大自然にしながら、アルプスの山岳環境について世界の研究者と研究活動が行えたり、大学などの研究機関と一緒に連携できたりすると、セールスポイントにつながると思う。ここからさらに全国からあこがれてきてもらえるような高校であってほしい。

○寮を拡充して県外から生徒を募集するのか、より魅力的な教育内容にして地域の子どもたちを増やしていくのか。東京大学でもカレッジオブデザインという新しい学部が開設されるが、白馬高校で学び、経験したことを評価するような大学入試制度が今後も進んでいくと思う。選択肢を増やすこと、積極的に大学と連携することにより、高度な学習を提供できるとさらによいと思う。

<北村局長>

○入学した生徒たちは、やはり「高校に入学した先がどうであるか」を見ていると思う。先につながるような支援をしていきたいと考えている。

○統計的に見ると、白馬中・小谷中の白馬高校への進学率は全体の約3割。ただ令和15年となると、卒業生が67名に減少する見通し。そうなると白馬高校への進学は20名ほど。今と同じ水準をキープするとなると、残りの50人を他所から募集することになるが、そこには寮の課題等も生じる。やはり3割を引き上げる努力をしていく必要があると感じている。

<石川校長>

○来年度から、学びの改革支援課と連携をし、遠隔授業の実証校となる。長野県総合教育センターから数時間分、理数科目をベースに遠隔授業を配信。大学進学を目指す生徒が主に対象となる。

○不登校の生徒に対しても、スクーリングやタブレットを用いた授業などを実践したいと考えている。寮生と地元生では状況が異なるため検討が必要。

○外部人材とも連携、活用をしながら、卒にはまらない授業構成を考えていきたい。

<白戸会長>

○いろいろな高校と関わっているが、10年間これほど先生方が熱心に取り組んでいるのは稀だと思う。地域とのつながりももちろん大事だが、きっちりと授業を行い、丁寧に生徒を育ててきた実績が今の白馬高校の信頼につながっているとすれば、この努力をどう継続させていくかが重要。松本大学の野球部は25年をかけ、昨秋の関東大会でベスト4まで行くことができた。エースは更科農業高校出身。部員の半数が公立高校やいわゆる弱小校出身であるにも関わらず、結果を残せたのは、同じことを変えずに継続してきたからだと思う。それほど教育には時間がかかり、長期的な視点が必要。ぜひこの協議会でもじっくりと時間をとって議論できればと思う。

(6) その他

<原多恵子主幹指導主事>

○地域連携、英語教育、通信教育、遠隔授業、外部機関とのつながりなど、さまざまな案が出され、よりよい学校にしていこうとする気持ちが伝わってきた。

○宿泊税の活用や寮運営など、県でも検討していきたい。

○高校生活の学びや仲間、その土地で過ごした3年間は「自分」を作ってくれるものだと思う。進学で外に出たとしても、就職する時あるいは県外で働いている時にふと思い返し、白馬に戻ってきてくれるよう、県としても高校と協力していきたい。

<丸山委員>

○グローバル講演会について。できれば午前を実施し、ウィングで行うのであれば毎年地域の方にも声かけをしてほしい。

○高校生ホテルについて。プログラムの中で、地域の文化や白馬の楽しみ方、マナー啓発などを高校生が行ってくれるとありがたい。以前は観光協会からの依頼で、バス待ちの外国人と話してもらったり、イベントのMCをしてもらったりした。高校生の英語の勉強にもなり、白馬を訪れる人の地域理解につながるので、ぜひお願いしたい。

○大学との連携について。白馬村は金沢大学と連携協定を結んでおり、推薦入学の話もきている。ぜひ進めていってほしい。

(7) 閉会の言葉

以上、第4回学校運営協議会は終了。